

田舞の所作に関する一考察

—春日大社の巫女舞を中心に—

木本百合子 (名古屋市立城山中学校)
平井タカネ (奈良女子大学)

1. はじめに

奈良の春日大社では、毎年3月15日に御田植祭という、五穀豊穡を祈願する祭典が行われる。この祭典において、八人の巫女による田舞が奉納される。本論文ではこの田舞の所作の特性について考察を試み、さらに民踊の所作との関連性や、その意味を探る手がかりを得たい。

2. 田舞の歴史

春日大社の田舞は、明治の始め当時の社司大宮守慶によって書かれた「春日大社神楽舞」に、春日大社では長寛元年(1163)に始められたと伝えられている。その後は、春日大社の祠官が書いた日記で鎌倉期の資料として残っている「春日社記録」の寛元4年(1246)正月十八日の条に「今日可有田植之義」と記されており、これは確かな記録としての初見といえる。それ以降も同「春日社記録」や、春日社で所蔵している「春日拝殿方諸日記」で文永年間や宝徳年間に、さらに室町期に関しては「大乘院雑事記」、「多聞院日記」にやはり「御田植」という文字が記されており、これらの文書を合わせ考えれば、その具体的内容については、いずれも詳細な記述は見られないが、御田植祭は時代を通じていずれも正月八日以降の申の日に行われ、八乙女といわれる巫女の舞が奉納され続けていたことがうかがえる。ところで、田舞の譜本は、元和2年(1616)当時の春日社の巫女、富田禎子によって書かれた「春日社神楽歌」が現存する最古の伝本とされているが、この譜本も、田植歌の歌詞のみで、舞の所作を表す舞譜は残されていない。その後、明治12年頃に大宮守慶によって書かれた「春日大社神楽舞」と明治35年に当時の弥宜大東延慶によって書かれた「社伝神楽歌笛鼓舞琴譜」に田舞の舞譜が残されている。

3. 田植歌の歌詞と所作

田舞は、春日大社では社伝神楽の中に位置づけられており、この社伝神楽が明治初期に当時の社司、富田光美によって国内各地の神社に伝えられた際、田舞も伝えられた。今回は、その中の香川県金刀比羅宮、山形県出羽三山神社の現在の田舞や春日大社に現存する明治初年に書かれた舞譜を資料として、春日大社の田舞の少しでも本来の形に近い舞を考察しその所作について明らかにする。

表1 田植歌の歌詞及び意味

①わかつねうえほよ なえたねうえほよ おんなの てにてをとりて ひろひとるとよ	②みまもしげや わかなえとるてやは しられたとるてこそ しらたまなゆらや とみくさのほな	③ふくまんどくに ほんごくへ うえちらし てにてをとりて ひろひとるとよ
若苗を植えましようよ。 田植共其が手に手を取り あって、むつまじく 肩を並べつつ、苗をば 拾ひ取って、次々と植 えて行くというのであ りますよ	田の畦に美しく咲いている 菫草の花よ、汝もよく 繁れよ。われらが若苗を 露の結んでいる若苗をゆ らゆらと、手に取るとい ふと、その露が白玉の様 にうつくしくこぼれるよ。	お米がよく出来る様に本 国到るところへ植えて植 えて植え散らし、そうし て穡々とよく出来たらば、 一回り揃うて拾い集めま しようよ、というのであり ますよ。

田舞の際に歌われる田植歌は表1のようであるが、田舞の所作と照らし合わせてみていくと、田舞の半分以上の動きが、歌詞の意味に対応したいわゆる「当て振り」の傾向が強い。

表2 「ナエタネ」に伴う動作〈例1〉表2に

	ナ	エ	タ	ネ
春日 現	左斜め前を 向き、胸の 前でかいぐ りを外巻き にする。		左手の中の ものを右手 でつかむ所 作	右後ろを向 きかげんで うしろへ右 手で物を落 とす所作
明 35	両手を広げ、苗の束を解き縛りわらを捨てる。			
明 12	両手で苗を 掴みあげる		苗のひもを ほどく	

春日現……現行の舞
明治35…「社伝神楽歌笛鼓舞琴譜」による表現
明治12…「春日大社神楽舞」による表現

示すように、①の歌の「ナエタネ」に伴う動作は「カイグリ」といわれるもので、この動きは明治の舞譜では「苗の束を解き」「苗のひもをほどく」と記されているように、まさに苗を植える前のしぐさであり、歌詞の当て振りである。

表3 「ウエホヨ」に伴う動作〈例2〉

	ウ	エ	ホ	ヨ
春日 現	左手の中の 物を右手で つかむ	左前へ植 える所作	左手の中の 物を右手で つかむ	真ん中へ植 える所作
明 35	苗を植える様子をなす			
明 12		苗を植える	右の手を上 げ苗を持ち	苗を植える

表3に示すように、①の歌の「ウエホヨ」に伴う動作も先の例1でほどいた苗を右手の親指と他の四本の指でつかんだ形で下方に置くしぐさであり、苗を植える模倣的動作である。

表4 「フクマンゴクニ」に伴う動作〈例3〉

	フク	マン	ゴク	ニ
春日 現	両手を上 へ噴水の ようにま わす		両手を 前への ばす	軽くこぶ しを握っ て腰へ引 き寄せる
明 35	両手を左右に(?)			
明 12	両手を下から上へす り上げて、両手を下 顔まで			

③の歌の、「フクマンゴクニ」の部分は、表4で示すように、大きな球を形づ

くる。フクマンゴクとは「福」、「万」、「石」ということで米の豊作を意味している。したがってこの所作も米でいっぱいの俵の形を表しているのであろう。

〈例4〉表5に示すように、③の歌の「ホンゴクエ」に伴う動作は、明治12年の舞譜には「向こうを見るようにかざしみる」と記され、さらに出羽三山神社の指導者の談によると、ホンゴクすなわ

ち「本国を見渡す」意味の所作であったのではないかという。

表5 「ホンゴクエ」に伴う動作

	ホン	ゴク	エ	ー
春日現	右手は頭のところで軽く握った手をパツと開く	右手を腰のところへ戻す	左手を頭のところで軽く握った手をパツと開く	左手を腰のところへ戻す
明35	右の手をあげる		左の手を上げる	
明12	向こうを見る様に右手をかざし見る。右手ははかまへ		左手をかざしてみる	
金刀比羅	左前方を向き、右手を頭上にかかげる	右手を腰に戻す	右前方を向き左手を頭の上にかかげる	左手を腰に戻す

以上は、ほんの一部の例であるが、このように田舞はいずれも歌詞の模倣的しぐさが多く、例に示したような動きが田舞の半分以上を占めていることから、田舞の動きの特徴はいわゆる「当て振り」にあると言えるであろう。春日大社の巫女舞指導者細田節子氏も、春日社伝神楽の中の他の巫女舞には「当て振りの動きはほとんどない」と述べているので、この当て振りは田舞独自の特徴といえる。

表6 「ヤレヤレ」に伴う動作

	ヤ	レ	ヤ	レ	ー
春日現	腕の前で両手を合わせる	左肘を曲げ右手は下ろす	右肘を曲げ左手は下ろす (手の平は後方に向ける)	両手とも軽くこぶしをつくって、左上から右下へ流す	こぶしをひらく
明35	三回手を打って左手を上げ、すぐその手を下げ、又手を打って右手を上げ、すぐその手を下げ、左へ回る(?)				
明12	平手を1つ打つ	左手は左肩右手は平にして向へ出す	右手は右肩左手は向へ出す	両手共そろえて右へ張り出し流れるようにする	
金刀比羅	左手の平の上に右手をうつ伏せにしてのせ、肘を伸ばして前へはり出す	左肘を曲げ右腕を伸ばして前へはり出す	右肘を曲げ、左腕を伸ばして前へはり出す	両手とも軽くこぶしを作って左から右横へ流し、指先を伸ばす	

また、田舞の所作には、当て振りの他に興味深いしぐさが認められる。まず例1で述べた「カイグリ」であるが、これは日本舞踊、童歌遊びや各地の民謡にもしばしば見られるものである。次に田植歌の①、②、③の間に必ず入る囃し詞である「ヤレヤレ」に伴う動作であるが、春日大社の現行の舞では、手を真下におろすが、表6に示す金刀比羅宮の現行の舞や、出羽三山神社の現行の舞では、腕を下ろさずに前方に伸ばす。この所作は今日の民謡の基本動作とされる「立てさしかざし」と全く同じである。次に表7に示すように、大きく足を後ろへ跳ね上げる動きの「ウエチラシ」の動作も、田舞にもしばしば表れる「打手」(手拍子)と組み合わせさせて、民謡によく現れる。

このように春日社伝神楽の他の巫女舞には見ら

表7 「ウエチラシ」に伴う動作

	ウエ	チラ	シ	ー
春日現	上半身前かがみになり両手を広げる(手の平下向き)	両手を胸の前で軽くクロスする	上半身前かがみになり両手を広げる(180°向きを変えながら)	両手、袖口を持つ
明35	横向く		後ろを向く	
明12	左北へ向き左右の手をかきさばく		右へ向き左右の手を組み合わせる	

れない動作がいずれも日本の庶民的な踊り、民踊と類似していることも、田舞の所作の特

徴であり、田舞と民踊は成立の段階または、変遷の段階において、何らかの強い相互関係にあることが充分推測される。

4. 春日大社の田舞と他の神社の田舞

最後に、明治初期に富田光美によって伝えられた、金刀比羅宮の田舞、出羽三山神社の田舞と、春日大社の田舞を比較してみると、富田光美が変えて伝えたために、明らかに異なる部分もあるが時がたつにつれて自然と変わってきた部分が多いようである。例えば金刀比羅宮は全体的にみて、舞楽調の動きで、終始腰を落した形のままで舞われる。出羽三山神社では、巫女だけでなく男性も混って、あたかも盆おどりの輪のように、テンポも速く楽しいふんい気で舞われる。

以上のように、その土地によって同じ舞が違った変容を見せていくことも非常に興味深いことである。今回は主として動作の特徴に注目して報告したが、今後は田舞の歌詞の成立期と動作との関係について更に詳しい検討を試みたいと考えている。

文 献

1. 千葉雅章, 日本の民踊, 虹有社刊, 1971
2. 後藤 淑, 春日社伝神楽史料註, 春日社伝神楽調査報告書, 財団法人春日顕彰会, 1975
3. 郡司正勝, 日本舞踊事典, 東京堂出版, 1977
4. 中臣祐定, 春日社記録一, 春日大社, 1955
5. 中臣祐賢, 春日社記録二, 春日大社, 1957